

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 26 号

平成 16 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

矢内原忠雄全集第 17 巻より(5)

余 裕

心の余裕は祈りによって与えられる。祈りは神と共にある時であり、神と共に居て下さる時である。それはどんなに短い時間でも、この世の仕事と生活の煩勞から離れて、神の事を考へる時である。あるいは、我らがこの世の煩勞の思いを、キリストに押しつけてしまふ時と言ってもよい。そのときがなければ、我らはあまりの忙しさのために心がみだれ、頭が破裂してしまふのである。

神が知っていて下さる。神が引き受けて下さる。神がよいやうにして下さる。信仰に由らずして「どうでもなれ」という時は、自暴自棄の絶望となるが、信仰に由って「どうにでもなれ」という時は、神は我らの心に平安と余裕を与へ給ふ。「主よ、聖意を成し給へ、聖意の通り私は従ひます。」と祈る事が、我らの心の余裕となるのである。

朝静かなときに、あるいは夜半目のさめたときに、我らは心をこめて神に祈る。或は仕事の最中に、或は電車の中でも、ふと神に向けて祈る習慣を身につけた者は幸福である。

ビリー・グラハム

日本に伝道に来たビリー・グラハムは、ムーディーやサンディー以来の大説教家であると言われる。私は聞かなかったが、世界どこでも極めて多数の聴衆を得て、熱弁を振って居る様子である。彼の説教の内容は単純であり、その方法は大衆的であって、深刻味はないやうであるが、彼自身は謙遜であることが最も大切であると言い、また大衆に煩はされることを最もきらっているといふ。

無教会の間には、お互いに対する批評が多い。しかし伝道者にとりて何よりも大切なことは、謙遜であることと、大衆の人気に煩わされないことである。無教会の間にはグラハム的雄弁はないが、しかし謙遜と静かさを重んずることにおいては、彼に劣るべきではない。

老年の感謝

温室育ちの花ならば、少しの寒気にあっても萎れるであろう。多年人生の風雪に耐へてきた信仰は、厳かにそびえる香柏のように、緑の色満ち満ちて、エホバの直きことを示すであらう。

神を信ずる者の人生には、下り坂といふものはない。天に天にと伸びて、豊かにうるほひ、年老いてなほ果を結ぶ。信仰の果、希望の果、忍耐の果、愛の果は、すべて天国の色に色づき、復活の香に香る。老いて人生の悲しみに遇う者は、挫けて地に臥すことなく、いよいよ天国に顔をあげて希望に生きるべきである。

人 生

人の一生はさまざまであって、或る人は平静な晩年を送り、或る人は年老いて後多くの涙を知る。調子良く行っているやうでも、思ひがけない事が起ってくるものである。

老年は体力・気力に衰へを感ずるが、せめて静かな晩年を過ごしたいと願ふのは人情である。しかるに「老いては手をのべて他の人に帯せられ、汝の欲せぬところに連れ行かれる」ことが、往々にして起るのである。

しかし老年には、老年の恩恵があり、苦難には苦難の恵みがある。然らば老年の苦難には、また特別特殊の恩恵がなければならない。それは天国の門が彼のために、一層広く開かれることであらう。

信仰と聖書

信仰を学ぶためには聖書を学ぶのが一番よい。しかし聖書が信仰を授けるのではなく、信仰を人に与えるものは聖霊である。それ故、まだ聖書を読んだこともないのに、キリストの福音を聞かされただけで信仰に入る人もあるのである。ただそのような恩恵を受けた人も、信仰を長く保ち、かつ深くして行くためには、聖書を学んで行く必要があるのである。

このことは、すでに信仰に入り、かつ聖書をよく学んだ者の信仰経験にも見られる事実である。聖書を読んで恩恵を受けるのではなく、恩恵を受けた後に聖書を読んで、「ああここにこう書かれている、」ということを発見して感謝を新たにす。聖霊が先ず働いて、聖書がそれを確認させる。しかしこの確認があるので、聖霊の働きが長く身に残るのである。

あと何年

願わくは我らに己が日を数ふることを教へて、智慧の心を得しめた
まえ。(詩篇 90 の 12)

あと何年生きるか、誰もわからない。しかし、いつまでも地上に
生きているのではないことは確かである。70 歳 80 歳の寿を重ねた人
は、自分の老い先の短いことを知らねばならない。病の重い人は、
召される日の来ることを思わねばならない。否、誰でも己が地上の
生涯に終のあること、そしてそれがいつ来るかも知れぬことを、計
算の中に入れて生きねばならないのである。

神の怒の日の来ることを思わず、罪の日々を重ねていてはならな
い。いつまでも此の世に生きているように思って、うかうかと空し
く日を過ごしてはならない。

毎日を正しく、かつ勤勉にすごし、空しいことに心と時を用いず、
残りの生涯を神の国のために使うよう、智慧の心をわれらに与えた
まえ。

子供と老人

家庭において子供の教育、殊に子供の信仰の教育を与えることが、夫婦相和に次いで最大の問題である。「子供が信仰をもってくれるように、」「子供が信仰の人となってくれさえすれば、」という祈りと願をもたない親があるであろうか。

子供が神を知らないために陥る罪、またそのために嘆く親の事を見れば、子供に信仰を教えることの重要であることは、言うを待たないところである。仕事が忙しいとか、子供に興味がないとかいう理由で、子供に信仰をもたせる努力をしない親は、子供に対して不親切であるだけでなく、神に対する責任を果さないものと言わねばならない。

信仰を恵まれたものは、自分の子供に対してだけでなく、親の救いについても心を用いる。……親たちが信仰をさえもってくれば、どんなにか老境に入った親たちの幸福であるのみか、子としてもち得る自分の最大の喜びであるだろう。親だちが信仰を抱いて天に帰るのを見送ることが出来たら、子としてどれほどの感謝・満足・安心であることだろう。

信仰を学ぶ方法

信仰を学ぶためには、聖書を読むにかぎる。わからない所にこだわり、それがわかってから先に進もうという態度では、一生かかっても信仰はわからない。わからない所は宿題として心に残して置き、わかるところを分かって行くのがよい。そうすれば聖書は一生かかっても掘りつくすことのできない真理の山であることが知られるのである。

聖書は神の真理の啓示であると共に、人間の姿を見せる鏡である。人は聖書を読むことによって、神を知ると共に己を知る。人間の喜びも悲しみも、罪も生命も、聖書を読むうちに人間の真相が知られてくるのである。

「自分は人生の苦勞を知らないが、人生の苦しみを知らない者には信仰がわかりませんか、」と問う者もある。私はその青年にいつくしみの目を注いで言う、「聖書を学びなさい。聖書を学べば、信仰がわかってくる。人生の苦勞は、求めて得られるものではない。しかしいつか君に人生の苦勞が臨むとき、聖書の言葉が君にその苦勞に耐える力を与え、そして君を信仰より信仰にと進ませるであろう。」

病人心得

1. 病気にかかった時は、自分が神の御手の中にあることを思うて、あわてることなく、静かに神によりたのむこと。
 1. 発病の原因、病気の経過や予後について思い煩うことなく、すべて神の経綸の中にあることを信じて、神の為に給うところに従うこと。
 1. 最初に、そして即刻、神と己との関係を正しく調整すること。罪を自覚し、その即座の許しを受け、神と己との間に何のこだわりもない状態にすること。
 1. 人を赦し、人に求めず、人の好意を感謝して受け、人と己との間に何のこだわりも持たず、平かな心になること。
 1. 聖書の言が真実であることを己が病床生活の実験によりて知ることを喜びとし、朝夕にそれを思い、それを味うて感謝すること。

病床10得

1. 神に帰る。
2. 自然に帰る。
3. 己れに帰る。
4. 神の愛を知る。
5. 人の愛を知る。
6. 己の罪を知り、キリストの赦しの恩恵を知る。
7. 人の罪を赦す。
8. 人生について神に従順になる。
9. 人生の意味と終局目的について知る。
- 10 復活の信仰に生きる。

看病人心得

1. 「汝ら立ちかへりて静かにせば救いを得、平静にして依りたのまば力を得べし」(イザヤ書 30 の 15)という聖言をすぐに、そしていつも、思うこと。看病人が病人よりも先きにあわててはいけない。
2. 病人は体も心も弱く、傷つきやすい細い神経になっている。それ故「傷める蘆を折ることなく、ほのくらき燈芯を消すこともない」いたわりの心が、看病人に望ましい(イザヤ書 42 の 3 参照)。病人の気になるような言葉を、病人の耳に入れてはいけない。
3. どんなに病状が悪くてもそれによって度を失うことなく、生命の主であるキリストにかたく依りたのんで、不動の希望をもつことが、看病人のつとめである。

最良の看護は、看病人の信仰と愛と希望である。

多磨霊園墓参の記

平成 16 年 5 月 23 日

山口周三

平成 16 年 5 月 23 日(日)の午後、4 月に発足した南原繁研究会の有志 5 人で、多磨霊園にある南原繁、矢内原忠雄、新渡戸稲造、内村鑑三 4 先生のお墓参りをした。曇り空で、雨の降りそうな天気であったが、最後まで降らず、緑が濃い霊園の道路沿いには、つつじがきれいに咲いていた。

まず、南原繁先生のお墓のお参りした。南原先生が戦後学生や国民を励まし、戦後教育改革に果されたことなどの大きなお働きから考えると、質素で小さな、南原家のお墓であった。お花を飾り、昭和 49 年 5 月 25 日(土)に女子学院でもたれた先生の葬儀で歌われた讃美歌 488 番(はるかに仰ぎ見る輝きの御国に)をうたい、山口周三が、祈りをささげた。ちなみに、南原先生の愛唱された讃美歌は、527 番(我が喜び我が望み)ということであった。

次に、矢内原先生のお墓におまいりした。矢内原先生のお墓は、木立に囲まれ、最近訪れた人もない様子だった。聞けば、矢内原先生の 3 人のご子息は、全員他界されたということであった。お花を飾り、先生の納棺式(昭和 36 年 12 月 26 日今井館)で歌われた讃美歌 489 番(清き岸边にやがて着きて)を歌い、矢内原先生から直接学ばれた鴨下重彦先生(元東大医学部長)が、熱い祈りをささげた。ちなみに、納棺式、葬儀の際歌われた先生のお好きだった讃美歌は、386 番(我こそ十字架のつわものなれ)、520 番(静けき川の岸边に)であった。

次に、新渡戸稲造先生のお墓におまいりした。新渡戸先生のお墓は、大きく、きれいに掃除されていた。メアリー夫人(日本名新渡戸萬里子)、生まれてすぐなくなられたトーマス君も同じお墓に納められていた。讃美歌 405 番(神共にいましてゆく道を守り)を歌った。この讃美歌は、内村先生の葬儀の火葬の際歌われたのを新渡戸先生が聞いて、自分の葬儀にも是非この讃美歌をとわれ、昭和 8 年 11 月 18 日青山斎場でとり行われた葬儀で歌われた。最近「我 21 世紀の新渡戸とならん」という題の本を出された樋野興夫先生(順天堂大学教授)が熱い祈りをささげ、その後、山口が賀川豊彦先生の「永遠の青年」という題の新渡戸先生をたたえる詩を朗読した。その詩の一節。

永遠の青年（抄）

賀川豊彦

大きかったね
その輪郭は
すっきりしてゐたね
その肌合は
武士道に
世界魂を注入した
その気魂は
日本の島に容れるのには
少し大き過ぎたね

巨大なる世界人　イナゾウ・ニイトベ
年経つと共に
彼の名は
花園の薫の如く
日本に愛せらるるであろう、
徳愛の人　日本人
おお　日本人中の日本人よ！

お墓の近くに新渡戸先生の椅子に座った銅像があり、そこに行った。新渡戸先生を深く敬愛する樋野先生は、先生の像を見て、深く感動された風であった。

最後に、内村鑑三先生のお墓にお参りした。内村先生のお墓には、有名な墓碑銘が、先生の筆跡で刻まれていた。

for Japan;
Japan for the World;
The World for Christ;
And All for God.

そばにルツ子さんのお墓があった。また、内村祐之先生のお墓もあった。同行の鴨下先生は、学生時代内村祐之先生から精神医学を学ばれたという。お花を飾り、内村先生徳愛の讃美歌 260 番(千歳の岩よわが身を困め)を歌い、米窪博子さん(キリスト新聞社社長)と石川信克氏(結核予防会理事)が熱い祈りをささげた。

今回は、南原先生の没後 30 年を記念して、南原先生始め、4 先生の本当に恵まれたお墓参りが出来、4 先生を偲ぶ事が出来てよかった。